



式 辞

理事長 井上 公夫

本日、ここに、ご遺族の皆様、ご来賓の皆様、そして多数の市民の皆様をお迎えして、第59回原爆追悼式を挙げるに当たり、動員学徒・女子挺身隊として出動中被爆し、犠牲となられた七千有余名の英霊に対し、深甚なる哀悼の誠を捧げるものであります。



発行所
一般財団法人
広島県動員学徒等
犠牲者の会
事務局
広島市南区比治山本町12-2
広島県社会福祉会館内
〒732-0816 電話 (082) 252-0316
郵便振替口座 広島0-8858番
印刷所 Taisei

被爆七十周年
記念号
第59回原爆追悼式特集
デジタルブック
「衝突の証言」
<http://www.douingakuto.com/>

が現在享受している平和と繁栄は、原爆死没者の皆さまの尊い犠牲の上に築かれたものであり、また、ご遺族の皆様方のたゆみない努力の賜物であります。

私どもの会では、86名の方の体験記を、文集「慟哭の証言」として発刊するとともに、ホームページで電子ブックとしても読むことができるようにしております。その一部は、世界に発信すべく、英文に翻訳するなど、より多くの人に被爆体験を知っていただくための取り組みを行っています。

被爆者の平均年齢も80歳を超えたなか、直接被爆した会員の中には、明日を生きる世代のために自分のやるべきことが多く、残された時間がないと焦燥感に駆られている人がおられます。時間の壁の向こうに被爆者の思いをどのように引き継いでいくことができるかが正に問われている被爆70年目の広島です。

本日は、引率の先生を含む50柱という多くの犠牲を被られた、当時の第一国民学校、現在の広島市立段原中学校の生徒さんに参列していただ

きました。今は勉強できることが当たり前の時代で十分に想像できないかもしれませんが、当時は皆さんと同じ年代の子どもたちが戦争の手伝いをして犠牲になったのです。もつと遊んで、もつと勉強して、もつとおしゃべりして、もつと食べてと、やってみることが多くあった子どもたちの無念を推し量る時に、あまりに若い犠牲者に哀惜の念に堪えません。

皆さんの、将来の活躍の場は、核兵器や戦争のない、平和な世界でなければなりません。未来を担う皆さんのために、安心して暮らせる平和な世界を築くように努力してまいりたいと思います。

終わりにりましたが、本日の式典に際し、ご遺族の皆様並びにご臨席を賜りましたご来賓の皆様には、厚く御礼申し上げますとともに、動員学徒の御霊に永久の安らぎと、ご遺族の皆様へ平安を、心からお祈りし、式辞といたします。



追悼のことば

広島県知事

湯崎 英彦

本日ここに「第五十九回原爆死没者追悼式」が執り行われるに当たり県民を代表し、謹んで追悼のことばを申し上げます。

顧みますと、あの忘れることのできない日から、七十年という歳月が過ぎ去りました。

人類史上初めて使用された原子爆弾は、この慰霊塔の上空で炸裂し一瞬にして広島を焦土と化し、無限の可能性を秘めた動員学徒や女子挺身隊の方々を始めとする多くの尊い生命が失われました。

祖国の発展と安泰を願い、建物疎開などに従事中に亡くなられた余りにも若い犠牲者の方々の無念の思いを推しはかる時、哀惜の念、胸に迫るのを禁じ得ません。

また、最愛の我が子や、肉親を失なわれた御遺族の皆様には、長い間言葉に尽くせない深い悲しみと、多くの困難を乗り越えてこられたところであり、その間の御心労と御努力の程は、察するに余りあります。

私たちは、先の大戦の体験から「あやまちを二度と繰り返しません」と固く決意しました。

しかしながら、戦後生まれの世代が大多数を占める中、戦争体験の風化が懸念され、一方では、今なお、恒久平和と核兵器廃絶への道のりには、険しいものがあります。

こうした今こそ、原爆の惨禍を乗り越えた「ひろしま」には、「核兵器のない世界」に向けた強い思いを国際社会と共有し、平和と安定の実現に向けて、努力して行く責任があると考えます。

そのためにも、戦争の悲惨さや、そこに幾多の尊い犠牲があつたことを、次の世代に語り継ぐとともに、国の内外に平和の大切さを強く訴えつづけていかなければなりません。

そして、この二十一世紀を平和で豊かな社会とし、広島に生まれ育ち、住み、働いて良かったと、心から思える広島県を実現していくことを、お誓い申し上げます。

終わりに、犠牲者の方々の御冥福と御遺族の皆様のお多幸を、心からお祈り申し上げ、追悼のことばといたします。

平成二十七年八月六日

広島市長

松井 一 實

本日、一般財団法人広島県動員学徒等犠牲者の会の主催により、第五十九回原爆追悼式が執り行われる

に当たり、犠牲者の御霊に対し、謹んで追悼の言葉を捧げます。

七〇年前、ひたすら我が国の安泰を願いながら、動員学徒として、また、女子挺身隊員として、軍需工場での作業あるいは建物疎開作業などに従事されていた数多くの方々が、

原子爆弾により、若くしてその尊い生命を奪い去られたことは、誠に哀惜の念に堪えません。また、最愛なる肉親を亡くされた御遺族におかれましては、今なお、その悲しみはいかばかりかと、拝察申し上げます。

戦後、今日の豊かさや繁栄があるのも、こうした尊い多くの犠牲に負うものであり、私たちはこれを無にする事なく、二度と悲惨な戦争を繰り返さないよう、次の世代に語り継いでいかなければなりません。

被爆者の高齢化が進む中、戦争体験や平和への思いを次世代の人々が共有し、さらにその思いを世界に広げ被爆者の悲願である核兵器の廃絶へとつなげていく取り組みが重要となります。

このため本市では、被爆体験伝承者の育成等、被爆の実相の継承に努めるほか、世界の六七〇〇を超える都市が加盟する平和首長会議のネットワークの活用など、様々な機会を通じて、今後とも広く、国内外の人々と平和への思いを共有してまいります。

また、本年広島は、被爆七〇周年



来賓の献花

という節目を迎えました。本市では被爆七〇周年を、原爆死没者の慰霊と被爆者の援護、被爆体験の継承という被爆都市ヒロシマの役割を再確認し、決意を新たに「平和への思いの共有」を体現する年とするともに、これまでのまちづくりの成果を踏まえ、まちづくりの新たな一歩を踏み出す年と位置付け、広島の将来に向けた取り組みを行います。

今改めて、あの日を振り返り、戦没者の方々の犠牲を尊い教訓として深く心に刻み、今後とも「核兵器の廃絶と世界恒久平和の実現」に向けて精力的に取り組み、戦争の悲惨さと平和の尊さを末永く後世に語り継いでまいります。

終わりに、御霊のこしえに安らかなる御冥福をお祈り申し上げます

とともに、御遺族の皆様の御健勝を
祈念いたしまして、追悼の言葉とさ
せていただきます。

平成二十七年八月六日



広島市立段原中学校
生徒代表

三 保 竜 己

本日は、第五十九回広島県動員学
徒等犠牲者の会の原爆追悼式に参列
させて頂いたありがとうございます。
す。原爆の犠牲になられた方々のご
冥福を心よりお祈り申し上げます。
今から七十年前、たった一発の原
子爆弾によって、広島街は壊滅し
ました。そして、多くの尊い命が散

り、絶望のどん底に突き落とされま
した。私と同じ年頃の生徒たちもた
くさん亡くなりました。

私たちの通う広島市立段原中学校
の前身である、第一国民学校の先生
と生徒五十名は、建物疎開の作業中
に尊い命を奪われました。

私たちの学校でも、毎年校内に建
てられている慰霊碑の前で慰霊祭を
行い、先輩たちのご冥福をお祈りし、
平和の尊さを再認識しています。

あの頃の生徒たちはどのように感
じて生きていたのでしょうか。憎む
べき戦争を、正しい戦いだと思っ
ていた人が大勢いたと思われま

す。こうした何気ない日常こそ本当
の幸せであり、一番の平和だと思
います。しかし、今を生きる私たち
は、この平和な日々感謝せず

にしているのではないでしょう

か。あの頃の生徒たちは、この当
たり前の日常さえ過ごすことが
叶わず、無念にもこの世を去っ
てしまつたのです。平和な世の中
にある命のありがたさを改めて考
えなければなりません。

悲しい過去を変えることはでき
ないけれど、今ある平和で明るい
社会を守っていくことはできると思
います。二度とこのような悲しいこ
とが起こらないようにするために、私

ちにもできることがあるはずで
す。例えば、身近なところから平
和をつくることです。

自分の気持ちを一方的にぶつけ
るのではなく、相手がどのようなこ
とを思っているのか、話し合いによ
って解決する道を探ること。違い
を認め合い、相手の立場に立つて
考え、お互いに支え合うこと。今、
一番近くにいる人を大切に、心
を通わせ、

ていくことが大切にして、心を通
わす。このようにして、私たちが
思っています。このようにして、私
たちは、身近なところから人々が
安心して暮らせる平和な社会を築
いていくことを誓います。

最後になりましたが、犠牲にな
られた方々のご冥福と、ご遺族の方
々のご多幸を心からお祈りし、謹
んで追悼の言葉とさせていただきます。
平成二十七年八月六日



第59回原爆追悼式

被爆70周年に当たる第59回原爆追
悼式が8月6日9時から、動員学徒慰
霊塔前広場で、遺族、来賓、代表校生
徒など約300人の参列により厳かに挙
行された。

式次第

一、開会の辞

一、国歌斉唱

一、黙祷

一、式辞

一、来賓追悼の辞(敬称略)

広島県知事 湯崎英彦

(代読) 健康福祉局社会援護課長 日下仁彦

広島市長 松井一實

(代読) 健康福祉局高齢福祉部長 松井勝憲

一、学校代表生徒の追悼の辞

広島市立段原中学校 生徒代表 三保竜己

一、献花及び来賓者の披露(敬称略)

(衆議院議員)

岸田文雄 平口 洋 河井克行
中川俊直 寺田 稔 亀井静香
小林史明 齊藤鉄夫 新谷正義
大平喜信

(参議院議員)

宮澤洋一 柳田 稔 山本博司
谷合正明 岡田克也

(広島県議会議員)

瀧本 実 渡辺典子 辻 恒雄
宮 政利 日下美香 山下智之
佐藤一直 畑石顕司 鷹廣 純
砂原克規 山本靖雄 佐々木弘司
河井案里

(広島市議会議員)

沖宗正明 森昌秀治 元田賢治
桑田恭子 山路英男 山本昌宏
安達千代美 海徳裕志 伊藤昭善
定野和広

(広島市遺族会) 副会長 増川 計
(広島市立段原中学校) 校長 栗田裕司

一、閉会の辞

一、閉会の辞

被爆体験証言者 寺前妙子さん 伝承文

被爆体験伝承者…辻 靖司

私は「被爆体験証言者の方からお聞きした事」を、みなさんにお話をしている、伝承者の辻 靖司と言います。きょうは「原爆被害のこと」「平和の大切なこと」「次の世代へヒロシマの伝承が大切なこと」について、お話をしたいと思っています。

1 まず最初に、私の自己紹介をさせていただきます。

私は1942年3月生まれの73歳です。原爆投下時の戦時中は呉市に住んでおり、3歳5ヶ月の幼児でした。3歳と5ヶ月の幼児でしたが、戦時中の事は現在でも断片的ですが鮮明に記憶しております。私の生まれた呉市は戦艦大和の建造や呉工廠と言って軍需品を製造する工場があった。軍港の呉市は何度も空襲に遭い、夜中にたたき起こされお母さんの背中に負われて防空壕へ避難した状況のこと。原爆投下後の焼け野原の広島市内を、お母さんに背負われて、爆心地から約1.3km離れた白島で被爆した兄を一日中探して歩いた道順、探し続け歩いて爆心地から北東へ1.6kmの広島駅近くの常盤橋付近の川岸の石段(ガンキ)にいた兄を探した時の母の喜びようは、現在でも断片的ですが鮮明に記憶

しております。

2 次に、私が伝承する「被爆体験証言者 寺前妙子さんのプロフィール」を簡単にご紹介します。

寺前さんは1930年(昭和5年)7月生まれです。女学校3年生の15才の時、電話交換業務に学徒動員された下中町(現在の袋町)の広島中央電話局(爆心地から540m)で、廊下に整列していた時に被爆し、左目を失われる大怪我を負われました。二つ違いの妹さんは動員学徒として、爆心地から800mの土橋で建物疎開作業中に被爆し亡くなりました。「建物疎開作業」とは、空襲により火災が周辺に広がるのを防ぐため、あらかじめ建物を壊して防火地帯を作ることです。寺前さんは戦後「動員学徒慰霊塔」の建設委員となつて建立活動にも取り組まれました。また、平和継承活動では多方面で熱心に取り組んでおられるので、その一端をご紹介します。

・一つは、「動員学徒慰霊塔」の建立後も、月2回の清掃活動、清掃後の読経、「動員学徒犠牲者の会」の会報発行など、動員学徒で亡くなられた方々の追悼

に取り組んでおられます。

二つ目は、25歳の時から被爆体験証言活動に取り組まれました。1984年から「広島平和文化センター・被爆体験証言者」として、被爆者証言活動に取り組んでおられます。2012年から広島市「被爆体験伝承者養成プロジェクト(被爆体験証言者の後継者養成)」に参加されております。

3 私が伝承活動で寺前さんを選んだ理由は、次の三つの事からです。

・一つは、非人道的な残酷な原爆投下により、15歳の若い女学生が一番大切な顔の大怪我をし、自らも四つものガンとの闘病生活と闘いながら原爆被害の障害に苦しみ、とてもつらく苦しい日々を乗り越え、戦後70年の長い人生を力強く生き抜いてこられたお話を沢山の人に伝承したいと強く思ったからです。

・二つ目は、戦時中の混乱の中で兄弟姉妹の相手を思いやる家族の強い愛情の絆、戦後、ご結婚をされ、優しい男のお子さんに恵まれた幸せな家庭の事、先生が生徒を思う気持ちや行動、そして、生徒が先生を慕う固い絆で結ばれた素晴らしい師弟愛のお話を沢山の人に伝承したいと強く思ったからです。

・三つ目は、寺前さんは「動員

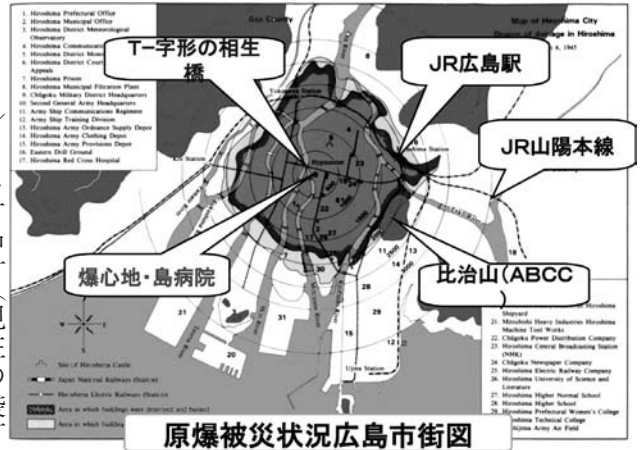
学徒慰霊塔」の建設委員となつて建立活動にも取り組まれました。私も「広島平和記念資料館・ピースボランティア6期生」として、館内展示品の説明や平和記念公園の遺跡などのご案内をしております。戦争の終わり頃(昭和19年8月)、学徒勤労令が発令され、12歳から13歳の男女の生徒は建物疎開作業など、14歳から17歳の生徒は、電話局や軍需工場に動員されて

4

次に、「原爆被災状況広島市街図」で、広島市街の原爆被災状況と寺前さんの避難経路を説明します。

①広島市街の原爆被災状況です。

T字形の相生橋、爆心地、JRライン、広島駅、横川駅、西広島駅、広島港です。赤色は全焼区域(半径1.5〜2.5km)、黄色は建物倒壊区域(半径2〜2.5km)、青色は川&海です、緑色は山林、この場所は比治山です。(放射線影響研究所の前身であるABCがかった) ②寺前さんの避難経路の説明です。



原爆被災状況広島市街図

・ 8 / 6 : 下中町(現在の袋町爆心地から540m) ↓ 鶴見橋(爆心地から17km) ↓ 比治山(爆心地から2km) ↓ 広島港(爆心地から4.7km) ↓ 金輪島(爆心地から南東約7km重症患者収容所)に避難されています。

③ このような広島市街の広い範囲へ、たった一発で大きな原爆被害をもたらした原爆投下の経緯からお話をします。説明内容は「広島平和記念資料館」へ展示されている説明記述を引用してお話をします。

・ 特徴のある「T字形の相生橋」は、広島市の中央に位置し、原爆の投下目標になりま

した。
 ・ 実際には、南東に約300m離れた島病院の上空約600mで原爆は炸裂しました。

炸裂して一秒後には、直径約280mの大きな火球になりました。皆さんも直径約280mの大きな火球を想像して見て下さい！とても大きな火球です！(国際会議場から平和記念資料館東館の長さの直径の火球です)

この火球の表面の温度は、約5,000℃になりました。爆心地の地表の温度は3,000℃溶ける温度1,530℃で溶鉱炉からドロドロに鉄が溶けている温度より、高い温度が広島市にそそがれたのです。

この「強力な熱線は」爆発後100万分の1秒から約3秒間降り注いだ熱線が地上に強い影響を与えました。その結果、爆心地から半径約1.2km以内において建物などさえぎる物がなく、直接熱線を浴びた人々は、皮膚が焼きつくされ、体内の組織や臓器に障害を受けて、ほとんどが即死したり、数日のうちに亡くなりました。
 次は「すさまじい爆風の被害」です。

爆発の瞬間、爆発点は熱によって空気が急激に大きく膨らんで、数十万気圧というものすごい圧力をもった衝撃波が広がり、この後を追って強烈な爆風が吹き抜けました。その最大風速は爆心地で440m/秒と言われています。新幹線の5.9倍の速さ！音速よりも速い爆風です！先日の25〜30m/秒の台風で大騒ぎして対策をするのでから、どんなにすさまじい爆風が広島市内を襲ったのか想像が出来るのではないのでしょうか？

次は「危険な放射線の被害」の説明です。普通の爆弾と相違する原爆の悪い特徴は、放射線被害の事です。放射線とは何でしょうか？放射線を懐中電灯でお話すると「放射性物質が懐中電灯の電池」「放射線はエネルギーを持った光」「放射能とは懐中電灯が持っている光を出す能力」に例える事が出来ます。

原爆は炸裂後、放射線を放射します。放射線は目に見えなく、臭いありませんが、放射線は人の体を突き抜け、奥深くまで入り込み、細胞を破壊し、血液を造りだす骨髄などを破壊し、人間の骨の髄までダメージを与えるとても恐ろしい兵器なのです。
 放射線による影響には、初期

放射線と残留放射線の二つがあります。初期放射線は爆発後1分以内に放射された放射線で、爆心地から半径1km以内には人は致命的な影響を受け、多くの人が数日のうちに亡くなりました。また、爆発後長時間にわたり残留放射線が地上に残りました。

それにより、直接原爆の被害にあわなくても、家族や同僚を探したり、救護活動のため市内に入った人は直接、被爆した人と同じように発病したり、死亡したりしました。

従って、これらの「熱線」「爆風」「放射線」の被害の説明から「爆心地から半径12km以内で被爆した人は致命的な影響を受け生存者は、ほとんどいない」事になります。(寺前さんは爆心地から540mの場所で被爆されています。どんなに危険な至近距離で被爆されたのか、理解をしていただけたいと思います。)

(次回に続きます)



警報なき空

井野口 靖弘

動員学徒「慟哭の証言」より抜粋(4)

橋の国道側に陸軍のトラックがエンジンをかけて停まっていた、兵隊三人が担当しておられて、負傷者を海田迄ピストン輸送するから「海田

つかまつて国道を家に向かった。とにかく嬉しかった父は途中で一度も休憩しないで一生懸命にペダルを踏んでくれた。

方面に帰る者は乗れ」と言われ助かったと思い、私も父に乗るのを手伝って貰い荷台の中央に腰をおろした、既に七人程座っていて、間もなく満員にならなくても発車した。父には海田で待っていると伝えて別れた。空から太陽が傷に照りつけ痛みを感じましたが、これは生きている証拠だということ、負けてたまるかと思っていると、兵隊が親指大のカンパンを一握りづつ皆んなに配ってくれた。一個を口に入ればはしたが暑さで口はカラカラでなかなか喉を通らない。大洲町、船越町、海田町の道路側にはブドウ畑がたくさん並んで植えて有り、トラックの上から眺めても多く成っているのがよく見えた、こんなカンパンよりも思っていたのは贅沢であった。海田に到着して全員降りて、トラックは又、広島方面に向かって行き、暫く待っていると自転車に乗って父が汗を拭きながら帰ってきた。そこから後ろの荷台に乗せてもらい両手でしっかりと

ようやく、憧れの土地が近付いてきて我が町にはいり、国鉄の踏み切りを渡っていると知らないおばさんが「かわいそうに大怪我をして」と言つてすれ違った。その時、ふと自分の事を言われたのかと気付いた。それまでは自分の怪我はたいしたこととはなれないと思っていたのが、そんなにひどく見えるのかと感じさせられた。帰る途中に小学校が有って正門の前で三人の方が負傷者の中に誘導しており、講堂が救急の救助対策処置所になっていて負傷者や多くの人が集まっていた。床にゴザが敷かれて負傷者は横に寝て治療してもらっており、殆ど大人で学生や生徒の姿は見当たらないので、自分は早く帰った方であろうと思った。自分は下半身は怪我をしていないので椅子に座って治療を受けた。今まで巻いていた包帯は砂ほこりで黒く汚れていたの、切り除いて貰い身体からほどいて除けてもらい胸、喉、顔、両手に薬をつけてもらい、一応の傷の

手当が済み、学校のタンガに寝かされて前を六年の時に学年担任であった城先生に担いで頂き、後ろを父が担いで家まで運んで下さる。初乗りで何と気持ちのよいもので有ると思いながら、やれやれようやく家に帰れたと安心して喜びをかみしめた。

家に着くと母は既に帰っており、顔を軽く火傷した程度で元気な姿を見てほっとした。親戚の者や近所の人達から見舞いや励ましの言葉を掛けてもらい、自分の怪我也もひどい方なのかなと感じた。火傷は全部が火膨れとなりビショビショに膨れあがり、方々から膿みが出てその匂いが臭く、自分の身体で有りながら残念で悔しいと憤慨したものである。かさぶたが乾くと痛むのでオキシユウルで拭いて湿らせてもらい蠅がとまるので、団扇であおいで看病人は忙しかつたことであつたと思う。第一に薬が充分に無いので病院を回つた

り漢方薬や食用油、砂糖、鍋の底に着いている墨がよい説等の色々と噂があつたが、自分は幸いに掛かり付けの医者が三日に一度往診して下さい懸命な看護を受けた。

見舞いの品でよくもらつて食べたのはブドウとトマトでおいしくて嬉しかった、山羊の乳も親戚から時々もらつて飲み、好きであつたので、有り難く深く感謝して戴いた。

父の後日談であるが、左右の胸と顔全面そして左の頭部を火傷でやら

れているので、(残念なことをした)生きられないであろうと思つたそうである。

我が家の前隣の家では、父親は兵隊で広島市の部隊に出征中、娘の女子商一年生は学徒動員で二人が死亡し、父親は今もつて遺骨もわからない状態であつた。

八月十五日の敗戦の玉音放送は居間に寝たきりのままで家族一同と聴き残念であつた。窓ごしに青空を眺めると庭に出てみたくなるが、身体の前面を傷しているの、寢床で上を向いたままの状態で横になることが出来ない。大変に不自由な暮らしであり早く起きられないかと思つた。両手の指をやられていたの、箸を持つことが出来ず自分の間は食べさせてもらい一週間後にやつとスプーンが使えるようになった。二十日過ぎた頃から箸が持てるようになり少し楽になった。二十五日間は身動きがでさず寝たきりで非常に不自由な目にあつて、もう二度と広島には出て行くまいとその時は思つたものである。

九月二十五日頃、江波の広商校舎に出頭するようにとの連絡を受けた。我々が被爆した皆実町の県師範跡の校舎は木造建であつたので、倒壊してとても使用することは不可能であり、見に行く気にはならなかつたが、戦争が負けたので陸軍兵器学校に取られていた江波の校舎は広島

商業に返してもらったのだと理解出来た。後日、久しぶりの懐かしい学校に登校して運動場に集合した。友達と会ったの最初の挨拶は「われは生きとったんか」「死んでたまるか生きとらあじゃ」であった。苦しく生きながらえた日々を思い浮かべて生存を確かめ合った。級友で六十名以上の犠牲者がありご冥福を祈念した。

学校の窓硝子はメチャクチャにこわれていて、これで勉強が出来るのかと思つた。するとまもなく学校から、これから寒くなるので窓硝子を入れるので寄付をするようにとのことで徴収があった。その間とところどころの窓には板が打ち付けて張られていた。

戦後は食糧不足であり、学校からの帰り道で橋の横の川土手から、川岸に降りて石垣についている小さいカキを取って、川の水で洗って食べるとおいしく、その時の味は忘れられない。又、畑のはずれの民家に寄って朝鮮アメを買って、食べながら土橋の電車停留所まで歩くのが楽しみであった。足は怪我をしていないので、歩くことは元氣であった。学校に通学しだして間もなく講堂に於いて身体検査が実施された、机も椅子も無い広い講堂の中で縦に長い列で並ばされて火傷の状態や負傷の箇所を調査し記録された。これは健康診断では無く実態調査であったことが

後でわかった。

被爆したことはケロイドさえ無ければ他の人には解らないのであるが、火傷したことは残念でたまらない。太陽の光に当たっていた箇所は全部やられており、白いシャツを着ておつてもシャツの表面は焼けていないのに陽に当たっていた内側の肉は火傷をしていた。ズボンが布が厚く出来ているので、表面が爪で縦にカグツタように黒く、焼跡が数箇所ついていても内側は無事であった。これを後で悪魔の爪痕といっていた。

十一月中旬頃、学校からの帰り道で羽田別荘の中を近道になるので、よく通つたものである。庭の南側に防空壕があつて、中を覗いてみると、雨水が溜り数体の黒い衣服を着けた死体が未処理のままに放置してあり、何ともいえない悪臭がしていた。その庭の東側道路付近は焼跡の整理がされていなくて、人骨が散乱して有り歩くとグサグサと音がするので靴の下を見ると骨であった。以後はその付近は通らないようにした。当時は江波線の電車は不通で土橋まで歩き、そこから広島駅間を電車に乗って通学していた。広島の間は原子爆弾が落ちてから、七十五年間は草木が生えないとよく言われていたが、二月中旬の天気の良い日の帰り道で、羽田別荘の焼け跡には未だ誰も住んでおらず、庭に植えてあ

る芝生も冬枯れして緑色が白っぽくなっている中に、タンポポが黄色の花を美しく咲かせて奇麗に開いているのが目についた。とても嬉しかったので一瞬駆け寄って花の前に座り込んで眺めた。花に對し有難うと言つてお礼がいたいような気持ちであった。後でその種をポケットに入れて持ち帰り家の庭へ植え、いまだに咲き続けている。

言うなれば、太陽の当たらない日陰に居た者は、火傷をしていないのでケロイドも無くて済み、怪我也軽く人には気付かれないので、人生において負傷者が苦勞した学校生活、進学、就職、恋愛、結婚、子供誕生、就業勤務等での心配も苦勞もケロイドの有る者よりも少なく、深く悩むこともしないで過ごせたと思えば誠に無念で大変悔しい。勿論ガスは吸うているので、内心は同様であるが他人には判り難いので、あまり差別はされなくて過ごせたのである。被爆者であるとなれば損は有つても得は無い世の中であつた。僻んで差別を受けたとは思いたくない心境であるが人の心中は解らないものである。ならば、何故に原爆を落とされた敵の飛行機が広島の上空に来たとき、空襲警報を発令しなかったのか？せめて警戒警報なりと発令しておればグラウンドで暑いのに整列しておる馬鹿はおらないはずである。空襲警報が出ておれば仕事をしている者はお

らないはずで、この責任は重大である。警報さえ発令されておれば樹陰等に避難しているか退避していたので、死傷者は三分の一以下で被害は少なく済んだのである。その発令する当日の責任者は誰であつたのか知りたい。敵のスパイであつたとは考えられないし憎く、恨めしく、悔しさが一杯である。最近になつてわかつた事であるが、当日の朝七時九分に警報が発令され、七時三十一分に解除になつたと知つた。自分は汽車通学でその時刻には汽車に乗つておる時間であつたから、知らされないうし気付く事もできなかった。既に解除になつていたので判らないでいたのであろうと推測する。広島地方で原爆のことをピカドンといえればお互いに通じた言葉であつたが、最近の若い者に話してもよくされない者が多くなつたようである。「過ちはもう二度と繰り返しません」誓いの言葉の意味を国民全員に、よく味わつて頂きたいものである。私が被爆者健康手帳を受けたのは昭和五十三年十月であり、実際には授かりたくない手帳であつた。手帳には爆心地から二キロメートルとなつてゐる。犠牲となられた人々の御冥福を祈念し、全世界に核兵器が無くなることを切望している。

(終)

被爆100周年に向けて、「動員学徒の悲劇」を、より大きくアピールすべきではないか!

動員学徒の悲劇、図書館でいろいろ読んでいますが、どうも平和大通り、百メートル道路は動員の学徒、少年少女の人柱でできた聖地に思えてきました。

世界には戦争による少年少女の悲劇は多くあります。会津飯盛山の白虎隊、西欧中世の少年十字軍、近くは沖縄のひめゆり学徒隊等。しかし、広島原爆の悲劇は、もともと大規模で最も悲惨です。世界的にも有史以来、例のないものと思います。

百メートル道路は、平和大通りとして、マラソンや駅伝、フラワーフェスティバルの舞台となつていますが、この大通りは、全国にその由来、悲劇、尊厳をもつともっと知らしめるべきだと思います。

今年是被爆70周年でしたが、あと30年、被爆100周年に向けて、何か考えるべきだと思います。私の思いつきは次のとおりです。

1 平和大通りの東端（鶴見橋又は比治山付近）と西端（観音町付近）に大仏建設

2 各所の学徒が倒れたところ、多くの死亡者がいたところ、多く茶毘に付されたところ（多くの橋及び已斐、牛田小学校）に地蔵の建設（巡礼地とする）

3 学徒の遭難した場所、学校名、人数などを明記した地図の作成

4 「慟哭の証言」等の体験記を全国及び全世界の学校等へ翻訳して大きく情報発信（「アンネの日記」のように）

廿日市市 平岡 壽一（90歳）
（当会へのお手紙の抜粋）

ご寄付お礼

平成27年7月から平成27年10月までに、次の皆様から貴重なご寄付をいただきました。ご厚志、誠にありがとうございました。

- 宇葉 宗人様
- 志水 清様
- 保田 禮二様
- 桑原 キヨ子様
- 谷増 喜久雄様
- 向井 宏子様
- 丸谷 照子様
- 池田 重義様

ご寄付いただく際には、下記の口座へお振り込みください。

郵便局 振替口座
0130001618858
一般財団法人
広島県動員学徒等犠牲者の会

ユニセフが行う外国コインの募金への協力について

動員学徒慰霊塔にお供えされた外国コイン28kgを、11月9日広島県ユニセフ協会を通じて国際連合児童基金（ユニセフ）に募金協力しました。世界中の子どもたちの命と健康を守るための支援活動に少しでも役立ててもらえることを期待しています。



供養会

原爆記念日の前日の8月5日に、慰霊塔周辺の掃除を済ませたあと、慰霊塔のすぐ近くにある西向寺様で仏式の供養を行いました。

- 一、開会の辞
- 一、読経
- 一、焼香
- 一、閉会の辞

この供養会は、毎年8月5日の10時（時間は前後します）ごろから行っていますのでご参加いただければ幸甚に存じます。

あとがき

今年是被爆70周年。「今年が最後のお参りになるかもしれません」と遠方から参られた遺族の方が言われました。「元氣に来年、再来年もお参りください」といいつつも、70年の年月の重みを感じざるを得ませんでした。

被爆者や遺族が高齢化するなかで、この度の追悼会では、役員の子や姉妹、被爆体験伝承者も式典のお手伝いに来ていただき、まだまだ活動できると感じました。（小林）

